

# 17世紀初頭の先住民クロニカに見るアステカ征服

—アルバ・イシュトリルシヨチトル『第13報告書』のテツココ王に関する記述をめぐって—

井上 幸孝\*

はじめに

16世紀後半から17世紀前半にかけて多く書かれたいわゆる先住民クロニカは、征服以前のアステカやメソアメリカの社会について知るための重要史料とされる。20世紀半ば以降、これら史料については次のような見方も提示されてきた。1959年には、メキシコの研究者レオン＝ポルティージャが『敗者の視点』と題したアンソロジーを出版し、征服戦争における被征服者の見方を読み取ることができる史料として、その有用性を示した<sup>1)</sup>。1990年代以降は、各クロニカの個別分析が顕著に進み、植民地時代前半の社会という文脈の中で先住民クロニカを読むという作業がなされてきた。その結果、史料に記述されている内容は、必ずしも先スペイン期の現実を反映しているとは限らず、それが書かれた時点の著者の社会的状況に応じた解釈が含まれていることが指摘されてきた<sup>2)</sup>。

フェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルシヨチトル (Fernando de Alva Ixtlilxóchitl, 以下、アルバと略記) は主に17世紀前半に複数の歴史書を著した植民地時代メキシコの有名なクロニスタ (クロニカ作成者) である。5編のクロニカの作者として知られ、代表的なものとしては、『トルテカ人とチチメカ人に関する歴史報告書 (*Sumaria relación de todas las*

---

\*専修大学文学部教授

*cosas que han sucedido en la Nueva España...*』、『テスココ王国史概要 (*Compendio histórico del reino de Texcoco*)』、『ヌエバ・エスパーニャの歴史 (*Historia general de la Nueva España*)』<sup>3)</sup>がある。これらはいずれもスペイン語で書かれている。

近年、この人物とそのクロニカに関する研究が再び活発になされるようになった。メキシコでは2013年にこのテーマの博士論文を提出したバスケス・ガリシアが研究論文を発表しており、レスブレが先スペイン期テスココ史を扱った近著でかなりの紙幅を割いてアルバについて論じている<sup>4)</sup>。米国では、『コロニアル・ラテン・アメリカン・レビュー』誌で2014年に特集号が組まれたほか、2015～16年にかけて複数の研究書が出版された<sup>5)</sup>。また、2015年には、本稿が考察の対象とする『第13報告書』の英訳も上梓された<sup>6)</sup>。

近年のアルバ研究の加速は、長らく「テスココの先住民クロニスタ」と見なされてきたこの人物とそのクロニカを見直す好機になると筆者は考える。1970年代にメキシコの史家オゴルマンはアルバを「ヌエバ・エスパーニャ人」と評したが、直近の研究動向からは、植民地時代を生きた人物としてのアルバの実像がいつそう明らかにされてきている<sup>7)</sup>。そこで、本稿では、17世紀初頭という執筆時期を念頭に置きつつ、アルバの歴史叙述の内容を具体的に分析する。アステカ征服の経緯について述べている『第13報告書』を考察の対象とし、先住民の「王」や「統治者」に関する記述を検討する。

## 1. アルバと『第13報告書』

アルバは、征服から半世紀以上が経過した1578年に生まれた。現在では、彼の家系について様々な情報が明らかになっている<sup>8)</sup>。彼はスペイン人の

父フアン・ナバス・ペレス・デ・ペラレダと混血の母アナ・コルテスの次男として、サン・フアン・テオティワカンのカシーケ家系に生まれたカスティソであった。従来、テツココ王家の子孫であるとか、ネサルコヨトルやネサルピリの子孫であると繰り返し言われてきたが、テツココ王家の直系でないということに留意しておく必要がある。アルバが生を享けたのは、征服時にはテツココに従属していたテオティワカンのトラトアニの家系であった<sup>9)</sup>。

アルバはおそらくはメキシコ市で生まれた。この点についてもテツココ生まれという根拠のない説があるが、父母や祖父母の生活環境を考えると、カシカスゴ（カシーケ領）を持つサン・フアン・テオティワカンで生まれた可能性もあるものの、祖父母の代からこの家系が不動産を有していたメキシコ市で生まれた可能性が高い<sup>10)</sup>。なお、1650年にアルバが亡くなった際には、メキシコ市北部のサンタ・カタリーナ教会に埋葬されたことがわかっている<sup>11)</sup>。

上述の通り、アルバはスペイン語で複数のクロニカを書いた。執筆を開始したのは、16世紀末のまだ若かりし頃であったようだ。クロニカの執筆は17世紀に入っても続けられたが、いつまでそれが続いたのかははっきりせず、最後の著作とされる『ヌエバ・エスパーニャの歴史』は、後述するように、完成に至ったのかどうかもはっきりしない<sup>12)</sup>。

アルバが書いたクロニカは公刊されることなく、何世紀もの間、原稿や写本のみを通じて後世に伝わった。最初に出版されたのは1829年のことで、この時に出版されたのがここで扱う『第13報告書』であった<sup>13)</sup>。その後、19世紀末のチャベロ校訂版、1970年代のオゴルマン校訂版によってアルバの諸作は広く知られることになった<sup>14)</sup>。これらの版は写本をもとにしたものであるが、1982年にイギリスで発見され2014年からメキシコに保管されている『チマルパイン文書』にはアルバ自身の筆跡による手稿が収められている<sup>15)</sup>。現時点では、この手稿に基づいた新たな校訂版の出版が待たれる。

『第13報告書』は独立した歴史書ではなく、『テスココ王国史概要 (*Compendio histórico del Reino de Texcoco*)』と呼ばれるクロニカの一部を成す。『チマルパイン文書』に収められている手稿では、『テスココ王国史概要』は68葉から成る。そのうち、およそ3分の2がこの『第13報告書』を占めている<sup>16)</sup>。同手稿に記された表題には、「スペイン人の到来ならびに福音の法の開始に関する第13報告書」とある<sup>17)</sup>。

この手稿では、『テスココ王国史概要』が始まる箇所にカルロス・デ・シグエンサ・イ・ゴンゴラによる後世の書き込みが見られる。ヌエバ・エスパーニャを代表する文人のシグエンサ・イ・ゴンゴラは、アルバの息子であるファン・デ・アルバを通じてその手稿を所有していた。シグエンサ・イ・ゴンゴラの書き込みは、「このテスココ諸王の歴史的概要の著者は、ドン・フェルナンド・デ・アルバであり、先祖にあたるテスココ領主ドン・フェルナンド・コルテス・イシュトリルシヨチトルを過大評価し、多くの点で真実には程遠いことから、大いに注意を払って読む必要がある」というものである<sup>18)</sup>。

この書き込みの内容は、必ずしもアルバの征服史叙述の価値を否定するものではない。「嘘」や「ありそうにない出来事」を述べているとして特定の史料の価値を否定することは容易である。しかし、本稿の冒頭で述べたように、現時点でのクロニカの読解および分析はその先を行っている。クロニスタが情報を解釈したり、事実と異なる記述をわざわざ残したとすれば、その理由は何かと問いかける必要がある。

『第13報告書』は、スペイン征服に関するテスココ人の見方を伝える史料と見なされてきた。『敗者の視点』において、レオン=ポルティージャは次のように述べている。

テスココ人の視点からの征服史の解釈もありました。その好例はテスココ王家の栄えある子孫、ドン・フェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルシヨチトルです。

彼がスペイン語で書いた『第13報告書』と『チチメカ史』の両史書には数多くの情報が収められています。それらは彼が今日では消失してしまったナワトル語の土着情報から収集したものです。しかし彼の判断基準はメシコやトラテロルコの作者たちとは相当異なるものです。<sup>19)</sup>

地理的すなわち都市国家に基づく集団の違いが、植民地時代に残された歴史記述に少なからず影響を及ぼしたのは事実であろう。トラスカラ出身者がトラスカラを中心に据えた歴史を描き出したり、チャルコ出身者がチャルコ地方の情報源を多く利用したりした例は確かに見られる。アコルワカンに属するサン・フアン・テオティワカンのカシーケ家系出身で、テツココ貴族と関係をもったアルバが、テツココを中心とするアコルワカンの情報をより多く利用し得たのも事実であるだろう。

しかしながら、近年の先住民クロニカの分析が「集団」や「民族」の視点だけで完結しないものになってきているのもまた確かである。とりわけ重要と思われるのは、クロニカもしくはクロニスタ間の歴史的な関係性である<sup>20)</sup>。誰がいかなる情報源に基づいて何を書いたのかを考えることで、そうした歴史的関係性が明らかにされる。また、アルバの場合、クロニカ執筆の動機として、当時の彼個人や家族に関する社会的な環境が近年次々と明らかにされつつある。それゆえ、クロニカが何の目的で書かれたのかも考え合わせる必要がある。このように、従来の先住民の視点（あるいはそうした「先住民」のうちどういった集団の視点なのか）に加えて、少なくとも2つの点——情報源もしくはクロニカ間の関係性、そしてクロニスタが置かれていた社会的状況——を考えることが不可欠になる。

他方、アルバのクロニカが後世に大きな影響を与えたことも明らかにされつつある。16世紀末から17世紀前半にかけて彼が書き残した内容は、17世紀後半以降、19～20世紀にいたるまで様々な歴史家によって利用された。例えば、21世紀のメキシコで広く国民に流布されている「詩人王」や文化

的な王といったネサワルコヨトルのイメージは、アルバに端を発するものであった<sup>21)</sup>。

以上から、植民地時代のクロニカ間の関係性やクロニスタの社会的状況に結び付くようなクロニカの記述の詳細な分析がさらに必要と筆者は考える。こうした問題関心にに基づき、以下では、『第13報告書』のテツココ王位に関わる箇所を絞ってアルバの記述の内容を見ていきたい。

## 2. 征服戦争中のテツココ王位の継承

『第13報告書』を一瞥すれば、いわゆるアステカ征服（メシコ征服戦争）におけるテツココ勢の貢献に力点が置かれていることは明白である。実際、この報告書が含まれる『テスココ王国史概要』は、征服後の時代において先祖の功績を主張する文書の一つであると見なされてきた<sup>22)</sup>。それゆえ、征服期のテツココ王家に関する情報がこの報告書にはふんだんに含まれている。そこで、まずはテツココのトラトアニ（王）の継承について、『第13報告書』の記述を見ていくことにする。

アルバは、コルテス到来時のトラトアニであったカカマが、テノチティトランのモテクソマ（モテクソマ・ショコヨトル）によって据えられた傀儡王だったと見なしている。いわゆるアステカ王国とは、テノチティトラン、テツココ、トラコパンの三都市同盟のことを指すが、スペイン人征服者一行がやってきた時点での実質的権力はテノチティトランのトラトアニであるモテクソマが独占していた。アルバは、テツココのカカマが「彼〔モテクソマ〕の手によって据え」られ、「タクバ〔トラコパン〕の王は彼の義理の父で、年老いた人物で、統治する力はもはやなかった」と述べている。こうして、モテクソマは強大な権力を行使し、「帝国全てを自身の手の中に」収めていたという<sup>23)</sup>。これらの記述に見られるように、実権を握っ

ていたどうかはともかく、スペイン人到来時にテツココのトラトアニという地位に就いていたのはカカマであったことをアルバは認めている。

事態が変化するのは、「悲しき夜」と呼ばれる戦闘でカカマが殺害された後である。モテクソマの跡を継いでテノチティトランのトラトアニとなったクイトラワクは、「テツココ王国の大人たちに、同王国の継承権は誰にあるのかを尋ねた」<sup>24)</sup>。その結果、テツココの要人たちは、ネサワルピリの末子であるヨヨンツインに継承権があるものの、コアナコチツインを選出することにしたという<sup>25)</sup>。

『第13報告書』のこの記述には曖昧な部分が残されている。額面通りに受け止めるならば、正当な継承権はヨヨンツインにあった。テツココ貴族が選出したのはコアナコチツインであったものの、その選出理由は明示されていない。アルバはいずれのクロニカもスペイン語で著しており、ナワトル語のトラトアニ、ウエイ・トラトアニ、クアウトラトアニなどの用語は用いていない<sup>26)</sup>。それゆえ、コアナコチツインが本来の王（トラトアニ）であったのか、代行の王（クアウトラトアニ）だったのかも明らかではない。

上記の「悲しき夜」で大敗を喫したコルテス軍は、トラスカラへと退却し、テノチティトランへの攻撃を仕掛けるための準備を進めた。この際、テツココの王子たちはスペイン人への協力を申し出たという。アルバは次のように述べている。

ネサワルピルツイントリ王の息子であるテココルツインは、カカマ王が差し出した人質の一人であった。彼はコルテスに次のように告げた。テスクコには必要とする人員はすべて揃っている。加えてテスクコの急使たち、とりわけイシュトリルシュチツイン、テトラウエウエスキティツイン、ヨヨンツインという王子たちとその兄弟たちが遣わせたキキスカツインを通じて、コルテス一行に友好的に尽くし協力するとの伝達が届いている。とはいえ、彼らのきょうだいのコワナコシュ

ツインは、テスクコ領主でありながらメシーカ人の味方なので、キキスカが使者としての報告をしにテスクコへ戻ると、コワナコシュツインは彼の殺害を命じた。<sup>27)</sup>

この引用文から見てとられるのは、コアナコチツインがテツココの王であり続けていることを認めつつも、スペイン語の「王 (rey)」という語は用いず、あえて「領主 (señor)」と呼んでいる点である。また、この引用文では同王が「メシーカ人の味方」であったと表現されている。これに加えて、アルバは、「コワナコシュツインはクアウテモク王の側についていた」こと、イシュトリルショチトル王子とその兄弟が「コワナコシュツインは既にメシコ〔メシコ=テノチティトラン〕へ行ってしまっていた」とコルテスに伝えたことにも言及している<sup>28)</sup>。

こうして、テツココは実質的に統治者不在の状態に置かれた。テツココの人々が町を捨て、テノチティトランへ出ていこうとすることを見て、コルテスは次のように決断する。

彼〔コルテス〕は、その権利を法的に最も適切に持つ、あるいは彼らが最もよしとする人物を、現地の王ならびに領主として即位させようとし、〔…〕ネサルピルツイントリ王の庶子ではあったものの、皆の要請によってテココルツインが領主に出された〔…〕。この人物は、きわめて思慮分別をもって統治を開始し、テスクコ王国に従属するすべての王国や地方に伝達係を送り出した〔…〕。<sup>29)</sup>

しかしながら、テココルツインはまもなく死去してしまう。アルバによれば、「彼は受洗してドン・フェルナンドを名乗ったが、テスクコにおいて洗礼を授かった最初の人物であった」<sup>30)</sup>。こうして、テツココの人々は再び後継者を選ばなければならなくなった。その結果、選ばれたのは、同じくネサルピリの息子のアワピクツァツインという人物であった。



その後、アコルワ人たちはアワピクサクツインを領主に据えた。彼は後にドン・カルロスを名乗り、ネサワルビルツイントリ王の庶子である王子の一人であった。だが、彼はほんの短期間しか統治しなかった。というのも、その後、コルテスとその他の者たちの要請によって、実に勇敢で、嫡子の一人であったことからイシュトリルショチトルが領主となったからである。先住民は皆、その人徳ゆえに彼を大いに尊敬しており […] 嫡出であることから、臣下たちはこの段階まで彼がこの地位に就くことを望まなかったのだった […]<sup>31)</sup>

コアナコチツインがテツココを捨ててテノチティトランへ行った後の経緯に関するアルバの文面を見ると、そもそも正式なトラトアニの継承の話をしているのかどうかすら不明瞭である。コアナコチツイン不在となった後、ネサワルピリの嫡子は誰も統治者になることはなく、コルテスの要請を受けて初めて嫡子であるイシュトリルショチトルがその役割を担うに至った。著者アルバはこの「継承」の不明瞭さあるいはそれが正当でないことを認識していたのかもしれない。

いずれにせよ、即位後のイシュトリルショチトルが、コルテスと並んでこの歴史叙述の主人公となっていることは明白である。「コルテスとイシュトリルシュチトル」という表現は、数えきれないほど『第13報告書』で繰り返されている文言である。こうして、テノチティトラン攻略の戦争は、単なるスペイン人とメシーカ人の戦いではなく、コルテス率いるスペイン人とイシュトリルショチトル率いるテツココ人が協同してメシーカ人に挑んだ戦いとして描写されている。

### 3. トラトアニに関わるスペイン語の用語

先述の通り、アルバはナワトル語のトラトアニという語を文中で使用し

ていない。それゆえ、トラトアニやこれに関連する人物に言及する際、彼がどのようなスペイン語の表現を用いているのかを検討する必要がある。『第13報告書』を詳細に検討することで、テツココ王にまつわるスペイン語の用語の選択と使用においてアルバが非常に慎重であったことが明らかになる。

テノチティトランのトラトアニに言及する際、アルバは「クイトラワ王 (el rey Cuitlahua)」や「クアウテモク王 (el rey Quauhtémoc)」のように、「王 (rey)」という語を頻繁に用いている。テツココのトラトアニに関しても、コルテス上陸時の「カカマ王 (el rey Cacama)」やその先代の「ネサルピルツィントリ王 (el rey Nezahualpiltzintli)」にこの語が使用されている。

だが、コアナコチツィンについては、「領主 (señor)」や「テスクコ領主 (señor de Tezcucó)」と呼んでいることが多く、意図的にこの表現を多用しているように思われる。中にはコアナコチツィンを「王」と呼んでいる箇所が見受けられるのも事実である。例えば、イシュトリルショチトルが統治し始めた後も「王であるクアウテモクとコワナコツィン〔原文ママ〕とテトラパンケサツィン (los reyes Quauhtémoc, Cohuanacotzin [sic] y Tetlanquezatzin)」と表現している箇所がある。しかしながら、全体の傾向としては、クアウテモクを「王」と表現する一方で、コアナコチツィンについては、「王」と呼ぶのを極力控えている。それどころか、「テスクコ領主の称号を持っているだけのコワナコシュツィン」と述べている箇所すらある<sup>32)</sup>。

このように、アルバはコアナコチツィンに対してスペイン語で「王」と表現するのを意図的に避けているが、継承の正当性という点ではコアナコチツィンがテツココの王であったと認識していたものと思われる。前述の「称号を持っているだけ」という記述は、トラトアニとして彼がもはや正当ではないという印象を与え、テココルツィン—アワシュピクサクツィ

ン—イシュトリルショチトルという継承の流れが必ずしも不適切なものではなかったかのように印象付けようとしたものと考えられる。

次に、これらテツココ王子たちに言及する際のスペイン語表現についても、アルバは慎重に言葉を選んでいる。彼らは「領主 (señor)」と呼ばれており、加えて「統治する (gobernar)」という表現が繰り返し使用されている。ここで注目すべきは、コアナコチツインを「領主」と呼ぶ一方で、イシュトリルショチトルらにも同じ表現を用いているという点である。こうすることで、イシュトリルショチトルに至る「継承者」たちをあたかもコアナコチツインと対等であるかのように見せようとしている。

さらに、『第13報告書』には、コアナコチツインを「その時、メシーカ人の武将だった (era entonces general de los mexicanos)」と表現している箇所がある<sup>33)</sup>。この表現の背後にもここまで見てきたと同様の意図があったように思われる。「武将 (general)」という語が使われている他の箇所を見ておきたい。テココルツインが統治している時期、すなわち即位前のイシュトリルショチトルがこのように呼ばれているのがその例である。それ以外には、イシュトリルショチトルがテノチティラン攻略の戦闘に参加している際にもメシーカ人の「武将」がいたという記述もある。

この「武将」という表現もまたアルバが選択的に用いた語彙であったと考え得る。『第13報告書』では、戦闘のための部隊を率いる人物を指す際にこの表現が無差別に使われているわけではない。事実、コルテス麾下の主要人物には「指揮官 (capitán)」という別の語が用いられている。つまり、アルバは「指揮官」という語を、兵を率いる先住民の主要人物にはあえて使用せず、わざわざ「武将」という別の語を適用した。その理由は次のように推測される。もし仮に彼らを「指揮官」と呼んだならば、イシュトリルショチトルをはじめテツココの要人たちはコルテスに仕えるスペイン人主要兵士と同じ扱いということになってしまう。ところが、「武将」という別の表現をわざわざ使用することで、イシュトリルショチトルらがコ

ルテスの配下の人物であるという印象を回避でき、スペイン人の軍の「指揮官」とは異なる立場の者たちであったと示すことができる。

アルバの『第13報告書』に見られるスペイン語の表現の慎重な選別と使用は、他の史料と比べると実に際立っている。例えば、『ラミーレス文書』の「断片2」と呼ばれている史料は、同じくアコルワカンの見方を反映する征服史の叙述である。この文書では、『第13報告書』についてここまで見てきたような作為的な要素は見られない。ネサワルピリは「王 (rey)」や「皇帝 (emperador)」と呼ばれているが、同時に「皇帝」カール5世にも言及している。そのカール5世は「王 (Rey)」でもあり、同じ「王」の語はモテクソマヤカカマにも用いられている<sup>34)</sup>。

『第13報告書』に記されたテノチティラン陥落後の以下の出来事は、ここまで本稿で論じてきたことと密接に関係していると考えられる。征服から約1年半後に起きた次の経緯は、征服戦争中の王位継承の曖昧な記述や慎重に選び抜かれたスペイン語表現と関係していたものと思われる。アルバが述べているところによれば、イシュトリルシヨチトルとコアナコチツインは1523年に次のように合意したという。

コアナコチツインは領主であることからテスクコ市に居残り、南側に広がるすべての領土、すなわち、チャルコ、クアウナワク〔クエルナバカ〕、イスツォカン〔イスカル〕、トラウイク〔トラワク〕および南の海〔太平洋〕に至るそれ以外の場所を取るということになった。そして、残りの半分、すなわち、北側に当たる部分はイシュトリルシヨチトルが自分のものとし、境界線と境界石をテベトラオストク、パパルカ〔パパロトラ〕、テナユカン、チマナウトラ〔チアウトラ?〕、シャルトカンに定め、オトゥンパ〔オトゥンパ〕とテオティワカンを中心地として、トランツインコ〔トゥランシンゴ〕、テシウコアカク、トラトラウキテペク、パワトラ〔パワトラン〕、および北の海〔メキシコ湾〕とパヌコまでの残りの場所を取ることにした。<sup>35)</sup>

このような地理的範囲を明示した後、アルバはイシュトリルショチトルが次のような行動をとったと述べている。

合意がなされると、イシュトリルショチトルはオトゥンバへ向かった。彼はそこに自身の住処となる宮殿を建て、テオティワカンにも同様に宮殿を建てた。彼がそこに入ったのは、同年のナウイ=トシュトリ〔ナウイ=トチトリ、「4・ウサギ」〕の日、すなわち我々の暦では〔15〕23年3月19日のことであった。<sup>36)</sup>

ここで述べられている内容は、いわば「アコルワカン王国の分割」である。この件に関して、アルバが利用したであろう情報源をどこまで忠実に書き写したのか、それとも何らかの解釈や事実の歪曲を加えたのかはわからない。だが、『第13報告書』を通して読んだ時、征服戦争時の王位継承に関する曖昧さの残る記述や用語の慎重な使用がなぜ必要だったのかが明瞭になる瞬間であるということは指摘できる。テツココの「統治者」となったイシュトリルショチトルは、王位継承が曖昧もしくは解釈次第では正当ではなかったかもしれないものの、「トラトアニ」に相応しい堂々とした振る舞いをし、それゆえに、最後にはコアナコチツインと領土を二分したという話の流れである。

#### 4. 「テツココの視点」再考

アルバのクロニカには、しばしば利用した情報源への言及がある。例えば、『第13報告書』では、アロンソ・アシャヤカという人物が書いたクロニカへの言及がある<sup>37)</sup>。テツココ王家の血を引くアシャヤカの記録をはじめ、アルバが利用した史料の中には、アコルワカンやテツココ固有の視点や歴史的情報が含まれていたことであろうことは想像に難くない。

2015年に出版された『第13報告書』の英訳の編者は、「スペイン人に対するテツココ人の多様な態度はメソアメリカ全体の傾向をよく表すもので、先住民の中にはスペイン征服に抵抗する者もいれば、自ら征服者となって参加した者もいた」と述べている<sup>38)</sup>。アルバの『第13報告書』で描き出される征服史は、まさしくテツココ人の中でも「征服者=勝者」の側に立ったものである。その意味で、「敗者」の視点ではない先住民側の征服史観を伝えるものであると言えよう。

ここ十数年の研究成果によって、「スペイン人=征服者」、「インディオ=被征服者」という単純化された伝統的な二項対立の見方はかなり修正された。このことは、半世紀以上前にレオン=ポルティージャが公刊した『敗者の視点』の価値を減じるものではない。むしろ、同書の出版があったからこそ、スペイン征服における先住民側の観点や態度についての研究がここまで深まってきたと言える。その結果、先住民史料の批判的な読み方もまた、伝統的な二項対立の図式に収まらなくなりつつある。とりわけ、マシューとオウダイクが提示した「インディオ征服者」という概念は、既知の史料の読み直しにも有用であると筆者は考えている<sup>39)</sup>。

本稿で試みた『第13報告書』の分析は、こうした研究動向において新たな観点を付加すると言えるだろう。アルバが使用した情報源が「勝者=テツココ人」のものであったとしても、その情報源の内容が忠実に再現されているわけではない。アルバはそれらを解釈し、場合によってナワトル語からスペイン語という言語面のみならず文化的にも「翻訳」した。上で見たような慎重なスペイン語の用語の選択と使用は、そうした言語および文化面での「翻訳」に他ならなかった。

冒頭でも述べたように、近年ではアルバの私生活に関する情報がいっそう明らかとなり、かつて無批判に考えられていたほど「インディオ的」でもなければ「テツココ人」でもないことが明らかにされてきた<sup>40)</sup>。ロメロ・ガルバンが指摘したように、彼の実生活は旧先住民貴族というよりも、メ

キシコ市のクリオーリヨ層に近いものだったと言えよう<sup>41)</sup>。

このことを考え合わせると、彼のクロニカ執筆の目的は「インディオ征服者」であった先祖の歴史に関する史料をそのまま書き写すという単純なものではなかった。そこで展開される歴史叙述は、彼自身や彼の家族のために、換言すれば、このクロニスタにとっての「現在」において意義あるものでなくてはならなかった。アルバは血統面ではカスティソであり、実生活ではクリオーリヨ的な環境に身を置いていた。しかしそれと同時に、クロニカ執筆時には、テツココ王子イシュトリルショチトルの子孫であることを強く意識していた。アルバにとってみれば、この人物の正当性を示すことが自身にとって有益であり、この先祖が単なるカシーケや要人ではなく「王」やそれに近い重要人物であると示すことが必要であった。無論、イシュトリルショチトルが被征服者ではなく、コルテスとともにメシーカ人を打倒した「勝者」となった点を殊更に強調することは、アルバにとって得策であった。このようにして、アルバは自身の社会的地位に直結する征服史を描き出そうとし、テツココ王に関連するスペイン語の表現や語彙を慎重に選んで叙述を行った。

では、そうした征服史の叙述は実際に彼の社会的地位の保全や向上に役立ったのであろうか。アルバは1608年11月に『テスココ王国史概要』をオトゥンバのカビルドに提出しており、この件に関する文書がオトゥンバならびに近隣のサン・サルバドル・クアウトラシングの要人たちによって作成されている<sup>42)</sup>。同文書から判断する限り、アルバの歴史叙述は地元社会で受け入れられたようである。当時のオトゥンバのゴベルナドル、アルカルデ、レヒドールらは「[...] 上述の歴史書は何ら問題や欠点はなく、実に確かで真正なものであり、我々が父母や祖父母から伝えられた記憶の通りであって、我々はこれが真実であると確信している」としてこの文書の真正さを認めている。さらに、「他の歴史家であったならば、我々はこのような認定は決して行わなかっただろう」とすら述べている<sup>43)</sup>。また、

この文書でイシュトリルシヨチトルが「王 (rey)」と呼ばれている点も興味深い。文書には、「テスクコ市と当オトゥンバ地方、ならびにアクルワ人の王国とその従属下の諸地方の先住民の王であり領主であった、および当地ヌエバ・エスパーニャのチチメカ・テクトリであったドン・フェルナンド・コルテス・イシュトリルシユチトル」と記されている<sup>44)</sup>。このように、アルバが描いた征服史の記述は、17世紀初頭のローカルな先住民社会の中で受け入れられたことが見てとられる。

## おわりに

本稿では、アステカ征服戦争の経緯をスペイン語で書き記す際、「王」に関わる記述やスペイン語の用語の選択をアルバが熟慮の上に行ったことを詳細に検討した。さらには、『第13報告書』が「勝者」となった先住民の見方を反映するものであると同時に、著者アルバの社会的環境に関連しており、彼が情報源をもとに解釈した結果であることを指摘した。

最後に、本考察の先に考えられる課題に言及して稿を閉じることとした。本論文では『第13報告書』の記述のみを対象としたが、これよりも後に執筆した『ヌエバ・エスパーニャの歴史』にも征服戦争に関する叙述がある。『ヌエバ・エスパーニャの歴史』に含まれる征服史の最大の難点は、完全な形ではないことである。後世の写本に基づいた従来の校訂版では、多くの語句が抜け落ちており、最後は中途半端なまま叙述が終わっていた。近年、『チマルパイン文書』に含まれる彼の手稿が公開されたことで、抜け落ちた語句は紙の損傷によるものであることが確認できた<sup>45)</sup>。換言すれば、従来知られてきた写本の作成時には、既に現在の状態に近い損傷があったことがわかる。さらに、手稿の最後の数葉ではアルバ自身が傍線で語句を消すなどしていることが見てとられ、草稿段階であったとすら想像させ



られる。現存する最終葉が最後の1枚だったのかどうかも断定しかねるが、『ヌエバ・エスパーニャの歴史』という著作そのものが草稿段階でしか残されなかったという可能性も考えられる<sup>46)</sup>。とはいえ、『第13報告書』よりも後にアルバが残した征服史の叙述が存在することにかわりはない。1608年に脱稿した『第13報告書』に書き記された内容が、同じ著者によってどう書き換えられたのかを考察することで、征服に対するアルバの見方をさらに明らかにすることができるだろう。

謝辞：本研究はJSPS科研費・新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」(JP 26101005, JP15K21760)の研究成果である。主要部分は国際コロキウム「ヌエバ・エスパーニャ史料への多様なアプローチ」(Coloquio Internacional “La Nueva España: Diversos enfoques sobre sus fuentes”, 2016年8月24日, メキシコ, 国立人類学歴史学研究所歴史研究部)ならびにCELAO第7回大会(VII Congreso del Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y de Oceanía, 2016年12月8日, ニュージーランド, ヴィクトリア大学ウェリントン)においてスペイン語で口頭発表した。本稿は口頭発表時の討論内容やその後の検討事項を踏まえて日本語でまとめ直したものである。

## 注

- 1) ミゲル・レオン=ポルティーヤ『インディオの挽歌—アステカから見たメキシコ征服史』山崎眞次訳, 成文堂, 1994年(Miguel León-Portilla, *La visión de los vencidos. Relaciones indígenas de la Conquista*, México, Universidad Nacional Autónoma de México, 1992 (13ª ed.)).
- 2) 先住民クロニカ全般については、次の拙稿を参照されたい。井上幸孝「植民地時代メキシコの先住民クロニカ(上)」『専修人文論集』第88号, 77~95頁, 2011年; 同「植民地時代メキシコの先住民クロニカ(下)」『専修人文論集』第89号, 61~82頁, 2011年。
- 3) 『ヌエバ・エスパーニャの歴史』は、現在では『チチメカ人の歴史 (*Historia de la nación chichimeca*)』の名で知られているが、アルバ自身の命名と考えられる表題を尊重し、本稿では『ヌエバ・エスパーニャの歴史』と呼ぶ。
- 4) Sergio Ángel Vásquez Galicia, “Aportes a la biografía del historiador tetzcocano Fernando de Alva Ixtlilxóchitl”, *Fuentes Humanísticas*, año 27, número 53, UAM-Azcapotzalco, pp. 145-163, 2016; Patrick Lesbre, *La construcción del pasado indígena de Tetzco: De Nezahualcōyotl a Alva Ixtlilxóchitl*, México, Instituto Nacional de Antropología e Historia, El Colegio de Michoacán, Centro de Estudios Mexicanos y Cen-

- troamericanos, 2016. なお、メキシコでは2009年に次の拙稿も出版されている。Yuki-taka Inoue Okubo, “La visión contemporánea sobre Ixtlilxóchitl y la visión de Ixtlilxóchitl sobre la historia”, en Rosa Camelo y Miguel Pastrana Flores (coords.), *La experiencia historiográfica. VIII Coloquio de Análisis Historiográfico*, México, Instituto de Investigaciones Históricas, Universidad Nacional Autónoma de México, pp. 229-239, 2009.
- 5) 同誌の特集号に収められた論文としては、例えば以下のものが挙げられる。Camila Townsend, “Introduction: The Evolution of Alva Ixtlilxochitl’s Scholarly Life”, *Colonial Latin American Review*, vol. 23, no. 1, pp. 1-17, 2014; Peter B. Villella, “The Last Acolhua: Alva Ixtlilxochitl and Elite Native Historiography in Early New Spain”, *Colonial Latin American Review*, vol. 23, no. 1, pp. 18-36, 2014; Bradley Benton, “The Outsider: Don Fernando de Alva Ixtlilxochitl’s Tenuous Ties to the City of Tetzaco”, *Colonial Latin American Review*, vol. 23, no. 1, pp. 37-52, 2014; Brian Amber, “The Original Alva Ixtlilxochitl Manuscripts at Cambridge University”, *Colonial Latin American Review*, vol. 23, no. 1, pp. 84-101, 2014. その他の研究書としては次のものがある。Galen Brokaw and Jongsoo Lee (eds.), *Fernando de Alva Ixtlilxochitl and His Legacy*, Tucson, The University of Arizona Press, 2015; Amber Brian, *Alva Ixtlilxochitl’s Native Archive and the Circulation of Knowledge in Colonial Mexico*, Nashville, Vanderbilt University Press, 2016.
- 6) Amber Brian, Bradley Benton and Pablo García Loaeza, *The Native Conquistador: Alva Ixtlilxóchitl’s Account of the Conquest of New Spain*, University Park, The Pennsylvania State University Press, 2015.
- 7) Fernando de Alva Ixtlilxóchitl, *Nezahualcōyotl Acolmiztli 1402-1472*, prolog. y selec. de Edmundo O’Gorman, México, Gobierno del Estado de México, 1972, p. 13.
- 8) この家系については各種文書を用いてかなり詳しい再構成がなされている。その例としては、以下を参照。Sergio Ángel Vásquez Galicia, *op.cit.*, p. 148; Peter B. Villella, *op.cit.*, p. 22; 井上幸孝「クリオーリョという観点から見た先住民記録者アルバ・イシュトリルシヨチトル」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』10号, 31~35頁, 2010年。
- 9) 征服時のテオティワカンの町のトラトカヨトル(トラトアニによる統治)は、ケツアルママリツインに始まる。この統治者の血を受け継ぐのが、征服直前に生まれたフランシスコ・ベルドゥーゴ・ケツアルママリツインで、アルバはこの人物の曾孫に当たる。
- 10) フランシスコ・ベルドゥーゴ・ケツアルママリツインの娘で、アルバの祖母に当たるクリスティーナ・フランシスカ・ベルドゥーゴの遺言書によれば、彼女はサン・ファン・テオティワカンのカシーカ(女性カシーケ)だったが、メキシコ市在住とされている。Fernando de Alva Ixtlilxóchitl, *Obras históricas*, ed. de Edmundo O’Gorman, 2 tomos, México, Instituto de Investigaciones Históricas, Universidad Nacional

- Autónoma de México, 1985, t. II, p. 287.
- 11) *Ibid.*, p. 370.
  - 12) 『ヌエバ・エスパーニャの歴史』については、1610年代に執筆を始めていたことがわかっている。
  - 13) Amber Brian, “Don Fernando de Alva Ixtlilxochitl’s Narratives of the Conquest of Mexico: Colonial Subjectivity and the Circulation of Native Knowledge”, in Susan Schroeder (ed.), *The Conquest All Over Again: Nahuas and Zapotecs Thinking, Writing, and Painting Spanish Colonialism*, Brighton, Sussex Academic Press, 2010, p. 132; Fernando de Alva Ixtlilxóchitl, *Obras históricas de Don Fernando de Alva Ixtlilxóchitl*, ed. de Alfredo Chavero, 2 tomos, México, Editora Nacional, 1952, t. I, p. 336.
  - 14) Fernando de Alva Ixtlilxóchitl, *Obras históricas de Don Fernando de Alva Ixtlilxóchitl*, ed. de Alfredo Chavero, 2 tomos, México, Editora Nacional, 1952; Fernando de Alva Ixtlilxóchitl, *Obras históricas*, ed. de Edmundo O’Gorman, 2 tomos, México, Instituto de Investigaciones históricas, Universidad Nacional Autónoma de México, 1985.
  - 15) 1982年、イギリス聖書協会（British Foreign Bible Society）が所蔵する3巻本の手稿が発見された。『チマルパイン文書（*Codex/Códice Chimalpahin*）』と名付けられたこれら手稿の一部は、米国やメキシコで後に出版されたものの、アルバの著作に該当する部分は、現在まで未出版である。2014年、『チマルパイン文書』は競売にかけられる寸前でメキシコ政府によって買い戻され、メキシコの国立人類学歴史学図書館に収蔵されることとなった。アルバ自身の筆跡による手稿がこの『チマルパイン文書』に含まれている。この手稿に基づいた『第13報告書』の校訂版はまだ出版されておらず、前述の英訳が刊行されているに過ぎない。
  - 16) 第23葉裏面から第68葉表面が『第13報告書』に該当する。
  - 17) *Códice Chimalpahin*, vol. 2, “Compendio histórico del reino de Texcoco”, f. 23r. 必要に応じて手稿を参照したものの、以下の考察での引用は、基本的にオゴルマン版を使用する。手稿は国立人類学歴史学研究所（INAH）がウェブ上で公開しているものを参照したが、本稿の脱稿時点（2018年8月）には閲覧できない状態にある。
  - 18) *Códice Chimalpahin*, vol. 2, “Compendio histórico del reino de Texcoco”, f. 1r.
  - 19) レオン＝ポルティーヤ 前掲書、15頁。なお、原文を参照した上で訳文の一部変更を加えた。
  - 20) Yukitaka Inoue Okubo, “Crónicas indígenas: una reconsideración sobre la historiografía novohispana temprana”, en Danna Levin y Federico Navarrete (coords.), *Indios, mestizos y españoles. Interculturalidad e historiografía en la Nueva España*, México, Universidad Autónoma Metropolitana, 2007, pp. 78–90.
  - 21) アルバのネサワルコヨトル像については、次の拙稿で詳細に論じている。井上幸孝「植民地時代の先住民記録に見る先スペイン期の歴史像の形成」、『古代文化』第69巻第1号（特輯：古代アメリカの比較文明論の新展開（下））、84～95頁、2017年。

- 22) Amber Brian, “Don Fernando de Alva Ixtlilxochitl’s Narratives of the Conquest of Mexico: Colonial Subjectivity and the Circulation of Native Knowledge”, in Susan Schroeder (ed.), *The Conquest All Over Again: Nahuas and Zapotecs Thinking, Writing, and Painting Spanish Colonialism*, Brighton, Sussex Academic Press, 2010, p. 131.
- 23) Alva Ixtlilxóchitl, *Obras históricas*, 1985, tomo I, pp. 450–451.
- 24) *Ibid.* p. 454.
- 25) 以下、ナワトル語の人物名は、敬称の「ツィン（殿もしくは様）」を付けた呼称で登場する人物については、基本的にこれを付けたままで適切と思われるナワトル語形で記す。なお、アルバの引用文中では微妙に異なっている形も頻出する。
- 26) トラトアニ (tlatōani) は「王」と訳され、都市や町（アルテペトル *altépetl*）の統治者を指す。ウェイ・トラトアニ (*huey tlatōani*) は、複数のアルテペトルを支配する中心的アルテペトルのトラトアニに用いられ、テノチティランやテツココのトラトアニはこのようにも呼ばれた。クアウトラトアニ (*cuauhtlatōani*) は、本来の王位継承者ではない人物が「臨時トラトアニ」もしくは「トラトアニ代行」として即位した場合の名称であった。
- 27) Alva Ixtlilxóchitl, *Obras históricas*, 1985, tomo I, p. 455.
- 28) *Loc. cit.* 以下、本稿の筆者による引用文中の補足や省略箇所は〔 〕内に示す。
- 29) *Ibid.*, pp. 455–456.
- 30) *Ibid.*, p. 457. なお、アルバは、テココルツィンについて「背は高く、とても色白で、どんなスペイン人よりも肌が白かった」、「カスティーリャ語を話せ」てコルテスと直に戦略を相談しあっていたとも書き記している。
- 31) *Loc. cit.*
- 32) *Ibid.*, pp. 462, 468.
- 33) *Ibid.*, p. 474.
- 34) Hernando Alvarado Tezozomoc, *Crónica mexicana/Códice Ramírez*, 3ª edición, México, Porrúa, 1980, pp. 134–149. なお、神聖ローマ帝国皇帝カール5世は、スペイン国王としてはカルロス1世であった。
- 35) Alva Ixtlilxóchitl, *Obras históricas*, 1985, tomo I, p. 484.
- 36) *Loc. cit.*
- 37) *Ibid.*, pp. 454, 467, 479. アロンソ・アシャヤカおよび彼が残した記録については、以下を参照。Lesbre, *op. cit.*, pp. 83–90.
- 38) Amber Brian, Bradley Benton and Pablo García Loaeza, *The Native Conquistador: Alva Ixtlilxóchitl’s Account of the Conquest of New Spain*, University Park, The Pennsylvania State University Press, 2015, p. 3.
- 39) Laura Matthew and Michel R. Oudijk (eds.), *Indian Conquistadors: Indigenous Allies in the Conquest of Mesoamerica*, Norman, University of Oklahoma Press, 2007.
- 40) アルバの「非インディオ的」な側面を指摘した研究としては、以下を参照。Bradley

- Benton, “The Outsider: Don Fernando de Alva Ixtlilxochitl’s Tenuous Ties to the City of Tetzaco”, *Colonial Latin American Review*, vol. 23, no. 1, pp. 37–52, 2014; Jogssoo Lee and Galen Brokaw, “Fernando de Alva Ixtlilxochitl and Colonial Indigenous Historiography from the Conquest to the Present”, in Galen Brokaw and Jongsoo Lee (eds.), *Fernando de Alva Ixtlilxochitl and His Legacy*, Tucson, The University of Arizona Press, pp. 3–28, 2015; Gordon Whittaker, “The Identities of Fernando de Alva Ixtlilxochitl”, in Galen Brokaw and Jongsoo Lee (eds.), *Fernando de Alva Ixtlilxochitl and His Legacy*, Tucson, The University of Arizona Press, pp. 29–76, 2015; 井上, 前掲論文, 2010年。
- 41) José Rubén Romero Galván, “Fernando de Alva Ixtlilxochitl”, en José Rubén Romero Galván (coord.), *Historiografía mexicana I: Historiografía novohispana de tradición indígena*, México, Instituto de Investigaciones históricas, Universidad Nacional Autónoma de México, 2003, p. 363.
- 42) また、この文書以外にテスココの行政の議事録にもアルバの歴史書が認定を受けたとの記載がある。Alva Ixtlilxochitl, *Obras históricas*, 1985, tomo I, pp. 517–521.
- 43) *Ibid.*, tomo I, p. 519.
- 44) *Loc. cit.*
- 45) 主に最後の2葉の右上部分が大きく破れてしまっていることによる。
- 46) 筆者が『チマルパイン文書』の手稿を確認したところ、『ヌエバ・エスパーニャの歴史』について、本文に記した点も含めて、写本や写本に基づいた従来の校訂版ではわからなかった以下の3点が判明した。1) 第49章以降は、章番号が空白になっている。また、これより前の章では章番号を書き直している箇所が散見される。2) 最後の2葉の損傷が特に激しく、写本や校訂版で抜け落ちている語句は紙自体の損傷が原因である。3) とりわけ最後の数章は書き直しや傍線の引かれた語句が多く見られる上、急いで書いたと思われる文字の乱れが激しい。これらの事実は『ヌエバ・エスパーニャの歴史』が草稿段階のものであった可能性を強く示しているが、最終的に断定するにはさらに手稿の精査が必要であろう。